

◆ 2022 年度 活動 報告 シ ー ト ◆

団体名：埼玉大学有機農業研究会

25A-19

代表者：代表理事会長 葛西 文二

URL : <http://saitama.eco.coocan.jp/> <https://twitter.com/saidaihozyou>

1. 活動が必要とされた状況

鴨川ほ場付近は、都市化の進展に伴い、農地が著しく減少しており、残された耕作地も管理されないため、特定外来生物等の野生生物（アライグマ、ハクビシン、タヌキ等）が生息し、近年、作物への被害は拡大している。また、雑草等が繁茂したほ場は、ダニ等の病害虫の生息場所となってしまう、近隣住民への健康への影響も懸念される。このため、休耕地を有機農業により栽培活動を行うことにより、自然循環メカニズムを活かし、人間と生物が共生し、いのち響き合う場を創るとともに、市民と農家と学生が交流し、自然や環境、地域社会のあり方を学ぶ場を提供する必要がある。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

2023年3月までにほ場を返還することになったため、2022年12月まで活動を行ったが、平均して週2日～3日計87日、栽培活動を行い、毎回平均6名（社会人2名、学生4名）が参加した。策定した作付計画に基づき固定種の種子を極力調達し、自ら育苗して、春夏及び秋冬野菜を作付し、収穫を行った。

3. 活動の成果

30種類近い野菜を栽培し、昨年より収量も多く収穫することができた（新たに作付した作物として、メロン、質量ともに改善された作物として、イチゴ、ミニトマト、里芋、台湾ヤマイモ、ゴボウ等）。ほ場は、雑草が繁茂するような状態はなく、土質も改善され、アマガエル、クモ、ナナホシテントウ等の益虫が生息している。学生は、栽培活動を通じ、有機野菜の美味しさ、自然の豊かさ、有機農業の素晴らしさを体験できた。



メロンの収穫



ゴボウ、台湾ヤマイモ等の収穫

4. 今後に残された課題

大豆、インゲン、カボチャ、キュウリ等のウリ類が育苗不良、害虫、夏の高湿等が原因で生育状況が悪く、収穫できなかつたり、前年より収量が減少したりした。有機農法に関する知見・経験を積み重ね、作物管理をどのように行うかが課題である。また、新型コロナウイルスの感染も継続しており、近隣住民（特に児童）と収穫体験等を通じた触れ合う機会を持てなかつた。アライグマ、ハクビシン等による被害も深刻化しており、獣害対策も検討する必要がある。2023年3月に現ほ場を返還するため、新ほ場への移転、休耕地を一から土質改善や農具小屋作り等のほ場整備を進めているが、緑肥作物を活用する等して早期に有機栽培による野菜作りができるようにしたい。